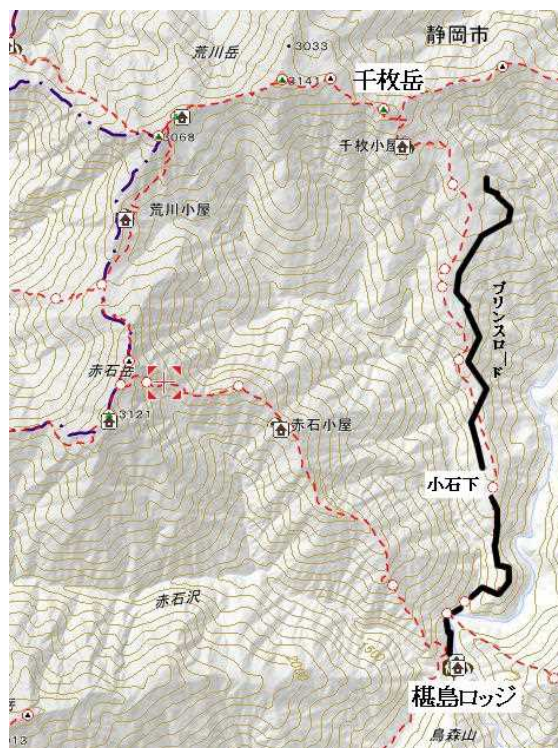


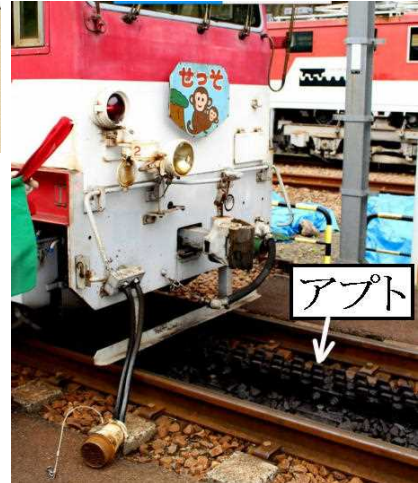
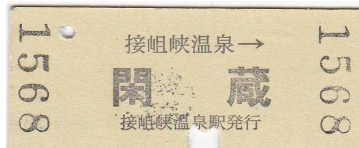


南アルプスの荒川岳の東側に位置する千枚岳へ行って来た。本来ならば榎島ロッジから丸一日かけて千枚小屋まで行って、そこから翌日千枚岳まで行き、さらに荒川岳や三伏峠方面に行くのが一般的である。今回は毎日新聞旅行から、千枚小屋のすぐ下まで自動車道があるので、榎島ロッジのガイドのもとにそこまで車で行って日帰りで千枚岳まで登ってくるというツアーが企画された。もう南アルプスに登る体力は無くなったと思っているので早速飛びついた。すでに満席であったがキャンセル待ちで滑り込めた。

集合場所の東京駅新丸ビルの前へ行くと、男二人・女10人が集まっていた。皆んかなりの高齢者である。もう一人いたのであるが集合場所を間違えて新宿へ行ってしまったということだ。パックツアーでは集合場所と日時を間違わなければあとは全部ツアー会社が導いてくれる。それさえ間違えるということは下には下がいるということだ。ツアーリーダーは植草パパ。俺より5歳位上のはずである。メンバーには80歳を超えている人も複数いるようで、俺は若い方からみてベスト3に入ると考えた。



初日は樫島ロッジまで行くだけであるので、途中で南アルプスあぶとラインの接岨峡湖上ハイキングなるものが組み込まれた。あぶとラインは千頭から井川までを結ぶトロッコ電車で、ほとんどが観光客と思われる。“アプト”とは、急こう配のところは機関車の力では登り切れないので写真のような線路間に設置されたギア状の補助機で登らせるものであるが、我々が乗った部分は勾配が少ないのでアプトは無かった。(2005年に瀬尾さんと一緒に大無限山に登った時にこの鉄道に乗ってアプトを見たことがある)昔懐かし紙の切符でハサミを入れてもらって、ただそれだけで感激であった。井川～閑蔵間が土砂崩れのため不通であるので、現在の終点の閑蔵(かんぞう)という駅からあぶとラインに乗って奥大井湖上駅で降り、一駅分を歩くというトレッキングが加えられたわけである。



樫島ロッジに泊まるのはこれで5回目くらいと思われるが、赤石ダムを作るときに使われた作業用プレハブをそのまま活かしているという。

南アルプスの南部はほとんど東海パルプの私有地であり、東京の山手線内の面積の4倍ほどあるという。かつての林業華やかかなりし頃にはかなりの木材が搬出されていて、私も1976年に南アルプスに登った時にはトラックいっぱい材木を積んだ様子を見たことがある。今は外材輸入が一般化したために、まったく林業は行われていないという。



翌日、樫島ロッジのガイドである米崎さんと美人ガイド(名前は忘れた)の運転する2台のランドクルーザーに乗って1時間以上かけて千枚小屋の下まで行く。この道の降り口には嚴重な施錠が行われていて一般の登山者が入ることは不可能である。1台目の運転をしている米崎さんがカギを開けて2台目が通るとまた閉めてしまった。“この道は皇太子殿

下が荒川岳に登った時に作られたのですか？”と米崎さんに質問したら、“皇太子殿下が登った時に使われたのでプリンスロードと呼ばれていますが、道そのものは林道であるので、もっと前からありました。”とのことであった。さすが東海パルプ、創業者は大倉喜八郎とのことでスケールが違う。

ランクルを降りた地点から 40 分も歩くと千枚小屋に着いた。この小屋は 2009 年 6 月に焼失したことで知られている。その後写真のように再建されたのであるが、1999 年に泊まったことのある私から見ると、前の小屋の方が大きくて立派であった。なお千枚小屋は 1993 年にも



焼失したことがあるらしい。だから前回に私が泊まった時に見た千枚小屋はまだ新しくきれいであった。2009 年の焼失原因はかなりミステリアスなようである。

小屋から千枚岳までは 1 時間半もあればクリアーできた。高齢者軍団は一人だけここまででリタイアしたが、あとは全員千枚岳を登り切った。樫島の二人のガイドが“皆さん本当に強いですね”とほめまくっていた。多分メンバーの年齢情報が彼らの手に渡っていたのであろう。

米崎さんは高山植物は、今年は 2 週間ほど早く終わってしまったと話していたが、秋の花であるマツムシソウはちょうどよかった。あとはヤナギラン・タカネビランジ・ナデシコ・シオガマ・トリカブトなどが最後の愛嬌を振りまいていた。

私は、特にこの 1 年急速に体力が弱ったと山に来る度に思っているが、今回一緒に登ったバーサマ達の元気さを見ると、“テメー、ナマいうんじゃないよ”と自分に対して言わざるを得ない。“これが最後の南アルプスになる”と言っていたバーサマは 80 歳をかなり超えていた。ガンバラナクッチャ。